

自治体産業振興計画策定に関する調査手法の今後のあり方について

合同会社政策支援

細川 甚孝
高戸 祥子

はしがき

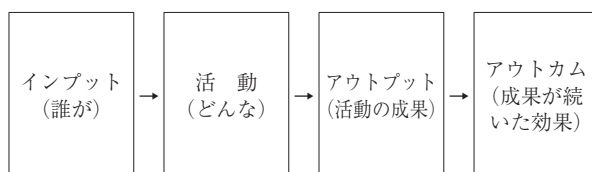
2017年度実施した武蔵野市産業振興計画改定事前受託調査での調査プロセスの紹介と、今後の産業振興計画を策定するための方向性を示す。ロジックモデルの視点から昨年度実施した調査プロセスを検討する。そのうえで、ロジックモデルの視点を示し、今後の自治体における産業振興計画のありかたを検討する。

第1節 ロジックモデルの効用と限界

1. ロジックモデルとは

一般に、ロジックモデルとは最終的に目指す変化・効果の実現に向けた体系的な因果関係を図示したものとされる。事業がどのようなステップで目的を達成しようとしているのかの仮説及び戦略を示したものとされる。これらのステップを示すために、インプット・活動・アウトプット・アウトカムというカテゴリを活用することが多い。インプットは「誰が」、活動は「なにを」、アウトプットは「活動の成果」、アウトカムは「成果の集積としての効果」を想定する。

図表1 ロジックモデル骨子



2. ロジックモデルの強み

ロジックモデルの強みは、ステークホルダー一つの活動がどのような効果が生んだのか検証が出来ることである。この検証には反照可能な指標設定が必要になる。部門別行政計画でロジックモデルが多用されているにもかかわらず有効な理由付けが難しいのは、この反照可能な指標設定が求められるためである。一

つ一つの事業の効率性を測るには、活動と活動の成果を按分することで分かるが、関与するファクタが複雑なために、成果と効果の妥当性について明確な因果関係を把握することが困難なことが多い。

3. ロジックモデルの限界と援用可能性

ロジックモデルの限界は二つある。

① ステークホルダー同士の関係性

一つ一つの活動に着目するが故に、複数の活動の関係性について論証が困難になることが多い。特に、行政における課題が複数のステークホルダーの関係性の上に成り立っていることが明らかになっている現在においては、政策・施策の社会課題の解決の有効性を検証することが難しい。

② 時間軸におけるリスク概念

ロジックモデルにおけるインプット-活動はあくまでも現在、そしてアウトプット-アウトカムは近い将来-遠い将来という時間軸と設定できる。そのなかで、遠い将来にはリスクを設定せずに遠い将来の延長線での姿を想定することになる。つまり「仮に」に状況が悪化したらというというリスクを検討できない。そのため、モデルが途中で変化した場合に対応できない。

第2節 武蔵野市産業振興計画に関する調査での実施ステップの課題

1. 分野別・領域別調査

今回の調査は以下7つの調査を行った。

武蔵野市における産業振興のステークホルダー及び住民に対して、消費行動・企業行動などの調査を行った。ステークホルダーの範囲という意味では包括的調査であった。

図表2 実施調査領域

	インター ネット調査	ホステイ ング調査 (郵送→ Web調査)	ヒアリング	各種統計
住 民	○		○ (3駅勢圏)	○
企 業 (団体含む)		○	○ (域内起業)	○
学 生	○			○

2. ロジックモデルによる分類

ロジックモデル（インプット・活動・アウトプット・アウトカム）でこれまでの調査を分類とすると図表3のようになる。インプットでは行政に関する分析、かつ、アウトカムについてはほとんど分析できなかった。

図表3 実施調査領域

インプット	活 動	アウトプット	アウトカム
住 民	消費・起業	各種統計	※
企 業 (団体含む)	商業行為・各種団体の行動	各種統計	※
学 生	消 費	※	※
行 政	※	※	※

第3節 今後の産業振興計画のあり方について

1. アウトカムのあり方の設定～フォアキャスト・バックキャスト視点の必要性

産業振興計画として、アウトカムを如何に設定するかが重要になる。現状においてはアウトカムについての議論をするには至らなかったため、将来的な産業のあり方の議論を深めることができなかつた。そこで、現在の地域計画策定においては以下の二つの視点を紹介する。

1) フォアキャスト

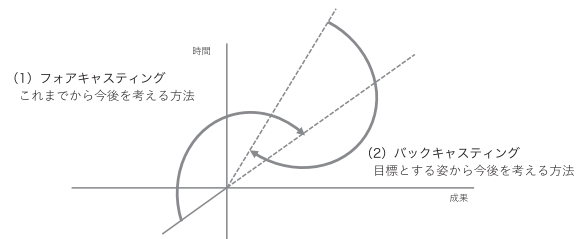
過去から現状までを起点として今後を考える手法である。現状の立ち位置から今後の方向性を予測するものであり、従来型の一般的な手法とも言える。現在の内外環境条件に規定されがちなために、結果として大きな変化を想定しづらい。

2) バックキャスト

今後のあるべき姿を起点として遡り、今何をすべきかを考える手法である。近い将来の望むべき像を設定

し、そのうえで実施すべき手段を検討するものである。現状の制約条件に縛られにくく、結果として大きな変化を発生させやすい。

図表4 フォアキャストとバックキャスト



2. フォアキャスト・バックキャストによるアウトカムの設定の手法

実際の産業振興計画のありかたにおいては、二つのステップが考えられる。

1) フォアキャスト的視点からの課題－原因分析

これまでの課題－原因からアウトカムを検討する。現状の課題を発生させている原因を解明することで、現状の方向性のなかで今後のあり得べき姿を抽出することができる。

2) バックキャスト的視点からの手段－目的創出

課題－原因分析を踏まえて、インプットとして登場する団体・個人などステークホルダーとの対話を行う。これをもとに今後のあり得べき姿を想定し、そのうえでアウトカムを設定する。インプット間での対話が介在するため、ここでのアウトカムはフォアキャストで得られるものより現実的なものになる。

まとめ～今後の産業振興計画のあり方について

情報化・国際化の拡大およびそのスピードアップにより産業のありかたが大きく変わるなか、自治体においてインプット（担い手となるステークホルダー）の数、そして階層も大きく変化することが想定される。こうした大きな変化に対応するための、自治体における産業振興計画の社会的重要性は一層向上するものと想定できる。

この重要性の変化において、一つ一つの事業・活動の効率性を測定するうえで計画の構成としてのロジックモデルの重要性もまた増大している。インプットが多様化するなかでは、従来の一般的なフォアキャスト

的視座から、アウトカムを合意するステップ＝バックキャスト的視座への転換が必要となる。今後は、合意をもたらす手法の検討を進めることで、バックキャスト的視座の有効性を検討する。

参考文献

- GSG 国内諮問委員会 社会インパクト評価ワーキングチーム (2017) 『社会的インパクト評価ツールセット 実践マニュアル』, 2017 http://www.impactmeasurement.jp/pdf/NAB_manual_ver2.pdf
- ドナルド・ケトル (著), 稲継裕昭 (監訳) (2011) 『なぜ政府は動けないのか：アメリカの失敗と次世代型政府の構想』 勁草書房, 2011